

著書紹介 陣内正敬, 田中牧郎, 相澤正夫 編 『外来語研究の新展開』

著者	田中 牧郎, 相澤 正夫
雑誌名	国語研プロジェクトレビュー
巻	3
号	3
ページ	197-199
発行年	2013-03
URL	http://doi.org/10.15084/00000724

陣内正敬, 田中牧郎, 相澤正夫 編

『外来語研究の新展開』

2012年10月 おうふう

A5判 246ページ 2,000円+税

田中 牧郎, 相澤 正夫



編者の3人は、2002年から2006年に国立国語研究所「外来語」委員会が実施した「分かりにくい外来語を分かりやすく言い換える提案」のプロジェクトで、作業部会を担いました。プロジェクトは一定の成果を上げたものの、提案までの過程では困難も多く、また誤解や批判も少なからず受けました。こうした中で、従来の日本語学に蓄積された外来語研究の知見にとどまらない、より広い視野からのアプローチによる外来語研究の新たな展開が待望されていることを痛感するようになりました。本書は、プロジェクトの終了後5年を経た2011年の段階で、筆頭編者の故陣内正敬氏（関西学院大学教授、2012年10月逝去）が音頭を取る形でスタートした企画です。

日本語の外来語研究は、西洋由来の語彙が急速に増加した大正時代ごろから盛んになりました。西洋文化の流入のありように関連付けて原語をさぐるところから始まり、原語と日本語との語形や意味のずれなどに関心が集まりました。英語由来の語彙が圧倒的な勢いで流入するようになった太平洋戦争後は、英語からの語彙の借用のあり方や、それが日本語や日本文化の中でどのような位置を占めるのかについて、多くの研究が生み出されました。このような言語文化論的な研究は現在も盛んであり、今後もいっそうの発展が期待されるところで

一方、戦後のある時期からは、「外来語の氾濫」と言われるように、その急増ぶりに眉をひそめる世論が次第に強くなり、マスコミでは種々の対応を行ってききましたが、平成の時代に入ると、国語審議会や国立国語研究所によって、外来語の過度な使用に注意を促し、言い換えなどの適切な対応を行うことが推奨されるようになりました。そうした動きと連動するように、人々の意識や社会のあり方、あるいは言語政策や言語教育の問題として、外来語をとらえなおす研究が登場してきました。背景には、日本社会の国際化や情報化により英語の比重が高まる一方で、高齢化や格差社会化などによって外来語弱者が増えていることなど、社会の構造や状況の大きな変化があります。こうした流れは今後も進むと予想されることから、人々の生活との関わりから外来語を研究する言語生活論的な研究は、今後さらにその重要性を増すものとなるはずで

本書は、近年急速に成熟し視野を広げた観のある外来語研究の分野を広く展望し、外来語をめぐる新しい日本語研究の姿を提示することを目指しています。外来語研究のさまざまな領域で活躍する第一線の研究者から寄せられた論文13編を、大きく「言語文化論的アプ

チ」と「言語生活論的アプローチ」の二グループに分けるとともに、冒頭に全体を展望する「総論」を掲げる形で、とりまとめを行いました。具体的には、以下に示すとおり、言語文化論的アプローチを「構造、歴史、語彙交流」、言語生活論的アプローチを「社会、マスコミ、教育」の三つの領域に分け、それぞれに2編ずつの論文を配置しています。

総論 外来語研究の意義（陣内正敬）

第1部 言語文化論的アプローチ—構造・歴史・語彙交流—

外来語の基本語化（金愛蘭）

文法的視点からみた外来語—外来語の品詞性とコロケーション—（茂木俊伸）

言葉の西洋化—近代化の中で—（米川明彦）

キリシタン語彙の歴史社会地理言語学

—oratio オラショを例にして—（小川俊輔）

日本語の世界進出—グーグルでみる外行語—（井上史雄）

中国における外来語受容の歴史的・地域的変異（荒川清秀）

第2部 言語生活論的アプローチ—社会・マスコミ・教育—

「『外来語』言い換え提案」とは何であったか（相澤正夫）

日本語と韓国語の外来語の受容意識—イメージ調査の分析—（梁敏鎬）

新聞の外来語はどのように生まれるか（関根健一）

放送の外来語—傾向と対策—（塩田雄大）

日本語学習者の外来語意識

—日本語教育における外来語教育を考える—（中山恵利子）

国語教育における外来語—コーパスによる類型化を通して—（田中牧郎）

第1部は、従来の研究を踏まえつつも、方法を磨き射程を広げることで豊かに成熟してきた外来語研究の現在の到達点を示すものです。第2部は、これまで十分に目が行き届いていないとは言いがたかった言語生活における外来語の問題を解明し、その改善策を提示する研究の重要性を示すものです。冒頭の総論としての陣内論文は、言語文化と言語生活の両面での外来語研究の意義と可能性を考える導きとなるものです。本書が、外来語研究の現在を知るための見取り図として役立つとともに、この分野にさらなる展開を呼び起こす起爆剤になることを願っています。

田中 牧郎（たなか・まきろう）

国立国語研究所言語資源研究系准教授。文学修士（東北大学）。昭和女子大学専任講師、国立国語研究所グループ長を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『雑誌『太陽』による確立期現代語の研究—『太陽コーパス』研究論文集—』（国立国語研究所報告122、共編著、博文館新社、2005）、『公共媒体の外来語—「外来語」言い換え提案を支える調査研究—』（国立国語研究所報告126、共編著、2007）、『病院の言葉を分かりやすく—工夫の提案—』（共編著、勁草書房、2009）。

社会活動：日本語学会評議員、社会言語科学会学会誌編集委員、日本語学会『日本語学大辞典』編集委員。

相澤 正夫 (あいざわ・まさお)

国立国語研究所時空間変異研究系教授・副所長。文学修士(言語学)(東京大学)。国立国語研究所研究開発部門長を経て、2009年10月より現職。

主な著書・論文：『分かりやすく伝える 外来語言い換え手引き』(共編著, ぎょうせい, 2007), 『ケーススタディ日本語の語彙』(共編著, おうふう, 1989), 『難解用語の言語問題への具体的対応 — 「外来語」と「病院の言葉」を分かりやすくする提案—』(共著, 『社会言語科学』13(1), 2010), 『外国語から外来語へ—言語・社会への定着過程を探る—』(『日本語研究の12章』, 明治書院, 2010), 『『福祉言語学』事始』(『日本語科学』23, 2008).

社会活動：日本語学会評議員, 日本音声学会評議員, NHK アクセント辞典改訂専門委員.